

三章 失い

期末試験を前に部活動が短縮される。

受験を控える三回生は勉強との両立のため先に帰る。その為、部活動の後片付けは二回生の和正達が中心に行い、一回生を指導する。

他の部活なら部室の鍵は部員で管理するのだが、水泳の授業で更衣室に使われるため、水泳部は鍵を職員室に戻す必要がある。

最近、掃除を押し付けられることが多かった和正は、遅れた分を取り戻そうと後片付けを引き受ける代わりに少し延長していた。

体育の教員に見つかり「早くあがれ」と怒られるので、見つかるまでの間だけだった。

その日も和正は体育教員に上がるよう言われ、練習を終えた。

部室で着替えた後、鍵を返しに職員室へ行く。

「……」

職員室の前に文雄が居た。彼は和正に気付くと視線を逸らす。合唱のこともあってかなり気まずく、和正も下手に折衝しないために無視を決め込んだ。

職員室には担任の法子だけだった。彼女が当直なのだろうか、話かけるのは嫌だが他に預けられる人も居ない。

和正が鍵を返そうと職員室に踏み込むと、文雄に呼び止められた。

「何入ろうとしてんだよ。期末試験前なんだから職員室に入るなよ」

「ああ、そうか。先生、水泳部の鍵を返しに来ました」

法子は電話をしており、小声で楽しそうに話していた。

「先生、鍵を……」

もう一度尋ねると不機嫌そうに振り返り鍵を受け取る。そしてまた電話に戻る。

「……」

その態度に不満もあるが、鍵さえ返せば用も無いのでさっさと帰ることにした。

水泳の授業が始まると教室にそわそわした空気が醸される。

男子の着替えはプール隣にある柔剣道場の裏手、外で行い、女子は水泳部の部室で行う。

部室棟は体育館寄りに立てられており、スモークガラスの大きな窓がある。以前は普通のガラス窓でカーテンがしかれていたが、今は取り外されている。

水泳の授業の前は休み時間の間に裏手へ周って着替える。そのため休み時間が潰されてしまうが、不満を言う子は少ない。というのも、裏手の正面が水泳部の部室の窓が見えるから。

スモークの向こうで着替えをしている女子達。スモークに黒のワイヤーまで入っているから中身はほとんど見えないが、何かが動いているのはわかる。そしてたまに聞こえる女子の声。

「えー、優奈、またおっきくなったとか？」

「もー、やめてよ。はずかしいなー」

女子達の声ともぞもぞ動く肌色の影に不自然に前のめりになる男子が多い。たまに忘れ物と称して戻る者もいたが、その理由は明らかだった。

和正は水泳の授業が好きではない。

長ったらしい説明を受けて順番で泳がないといけないだけでなく、あまりスピードを出すと、前の子にぶつ

かりかねないから。自分のペースが乱され練習にならず、ただ疲労感をもつだけだ。

「平泳ぎは水を蹴る感じで……。バタフライは……」

わかりきった説明を聞くのは眠くなる。かといってぼんやりしていると怒られるのも去年学んだ。眠気を我慢しながら時間が過ぎるのを待った……。

「田所。お前、水泳部だったな」

泳ぐ順番になったところで教員に呼び止められる。

「はい」

「体育でやらんでもわかってるだろ。先生、時計忘れちゃったんだ。タイム測れないと困るんで、すまんが水泳部の貸してくれないか？」

「わかりました」

和正は大きなタオルを借りてプールサイドを出る。そのまま部室に向かおうとして足を止める。よく考えたら今は女子が着替えに使っている。当然、中には女子の衣服がある。

「おいおいおい」

和正は考え直し、校舎に戻る。職員室まで走ったところで、半裸短パンの生徒に教頭が驚いていた。

「すいません、ストップウォッチ取りに来ました」

和正は体育教員の机に置かれたままの赤い時計を取る。オンオフを確認してからプールへと戻った。

「おう、遅かったな。あれ、これ水泳部のじゃないのか？」

和正が戻ると教員は肩で息をする彼を不思議そうに見ていた。

「ぜーぜー……。水泳部の部室、入れませんよ」

「……ん？ ああ、そうか。すまん」

水泳部の部室が入れないことを思い出し、教員は悪かったと背中をばしばし叩いてきた。根は悪い人ではないのだが、少々配慮の足りないタイプ。明るい性格もあって嫌われていない。

「それじゃタイム測るか。出席番号順に並べ」

プールサイドに一列に並ぶと、和正は違和感を覚える。

「ん？」

整列をすると頭数が足りない気がした。授業が始まった時は確かに居たはずなのに。

「島谷がさっきスッ転んで足怪我して保健室だよ。委員長が連れてった」

和正がきよろきよろしていると、芳雄が耳打ちしてくれた。

「ああ、そう」

「……っていうか、俺泳げないんだけど。バタフライってどうやんの？」

「勢いだよ、勢い」

「なんだよ、たよりねーな」

運動が得意で好きな芳雄だが、今一つ原理のわからないバタフライだけは苦手らしい。

今日も結局泳ぎ方がよくわからずかなりの時間を掛けてようやく泳ぎ切っていた。

「おいおい、新記録だぞ」

タイムを測っていた子が芳雄の時間を見て面白おかしそうに言う。

「くうー、誰だよ、バタフライとか意味わかんねー泳ぎ考えたの。クロールと平泳ぎだけでいいじゃねーか

……」

あまりに情けない結果に芳雄は真っ赤になって地団太を踏む。

「おい、和正、今度俺にバタフライ教えろよ。特訓だ」

「……ああ、いいけど」
「よし、夏休みの間にバタフライから背泳ぎ、全部覚えて休み明けにはみんな驚かせてやるかな！」
たからかと宣言する芳雄だった。

＊＊

着替えを終えて教室に戻り、次の授業までしばらく休もうと机に突っ伏す。
騒がしいおしゃべりも予鈴が鳴ると鎮まる。

和正は顔を上げて授業の準備をするが、しばらく待っても教員が来ない。よく見ると女子の数人も戻っていない。

五分、十分と待ってようやく体育の教員がやってきて黒板に大きく自習と書く。

突然の授業無しに喜ぶ男子達を後目に女子は何か原因を知っているらしく、お互いに耳打ちし合っている。
和正は尋ねる気も起きず机に突っ伏していたが、それでも耳に入り込むひそひそ声。

「……なんか気持ち悪いよね」

「……うん。誰だろうね、犯人」

「……男子？」

「……じゃない？」

しばらくして再び体育教員がやってくる。

「おい、田所、ちょっといいか？」

手招きされて廊下に出る。

「お前さ、水泳部だよな」

「はい」

「さっきの授業で水泳部部室に入ったか？」

「？ いえ、鍵無いいし、女子が更衣室として使ってるのに気づいて職員室に行きました。教頭先生に驚かれましたけど」

「そうだよな。あの時計は普段体育で使ってるやつだもんな」

「どうかしたんですか」

「ああ、ちょっとあってな」

言いくそうに言葉を濁すが、話の内容から水泳部部室と水泳の授業が関わっていることがわかる。さらに女子数名が戻ってこないことを考えると、原因もわかりそうだった。

「すまん。戻って良いぞ」

「はい」

これ以上聞く気にもなれず、素直に教室に戻る和正。ドアを開けると女子達の嫌そうな視線が向けられる。
「瞬ひるむも、何もやましいことはない」と席に戻り、再び突っ伏す。

「……やっぱあいっじゃない？」

「……だよな。だって、さっきの授業も抜け出してたし……」

「……それに水泳部でしょ？ 鍵とかもってるんじゃないの？」

かすかに聞こえるひそひそ話では要領が得られない。

そしてかっつんと頭に何か当たる。見ると、消しゴムのかすだった。

振り返ると浩司がにやにやしながら彼を見ていた。

随分と子供じみた嫌がらせを無視し突っ伏す。

その後もしばらく消しゴムを投げられた。

試験を前に和正は図書館で勉強をしていた。

他のクラスメートは優奈と文雄の作った試験対策を元に勉強しているが、意地になって練習に参加しなかった和正は受け取れず、自力で勉強していた。

「ったく、意地張らないで市川さんに頭下がりやいいじゃん」

文雄は和正をたしなめつつ、対策のコピーを見せる。

「そうはいかない。それに別にそんなん無くてもちやんと授業を受けていればな……」

「ちゃんと授業受けてたのか？」

「……いえ」

「だろ？　ったく、お前だって部活大変なんだし、背と腹、替えてでも実を取れよな」

「どうやってだよ」

「だから、市川さんに謝ってだな……」

「田所君が私に謝るの？　どうして？」

振り返ると優奈が居た。

「うわ、いつから」

「もう……。ずっと居たよ。二人のおしゃべりで気付いたから注意しに来たの」

優奈は私語厳禁の張り紙を指さし、にこやかに叱る。

「……ああ、すまん。控える」

二人は素直に謝り、優奈に向きなおる。

「それより、勉強中だった？　どう、田所君、今回は補習、大丈夫そう？」

「ん？　ああ、まあな。とりあえずなんとか……」

「本当？」

中間テストの結果を見るに、和正はあまり自信が無い。去年は優奈からの特訓があったからなんとかこなしものの、一人でとなると得意科目以外は赤点が目立ち、補習授業とプリントをいくつももらった。

「わからないところがあつたら力になるよ」

「おまえなあ、無理するなよ。結局試験対策ももらってないんだし、ここは市川さんに頭下げてさ」

「……そうか、すまん。じゃあ頼むわ……」

和正はぺこりと頭を下げる。これまでも何度か似たようなこともあり、頭を下げることに特に抵抗はなかった。

「うん。じゃあ、こっちに来てよ。みんなと一緒に勉強しよう」

優奈の指さす机には文雄と千絵が居り、勉強を教えているのが見えた。

「ん？　その二人は？」

「うん、「一緒に勉強しようって思って」

「……騒がしいから注意するだけのつもりだったのに……」

「でも、勉強を教えるのって身に着きやすいつて筒井君も言ってたでしょ？」

「まあ、そうカリカリすんなって。少しの我慢だ。人間、我慢する練習も大事だぞ」

不満そうな文雄に芳雄がすり寄ると、千絵があからさまな嫌な顔をしていた。

「仕方ないな。とりあえず、うるさくしないでくれよ」

「はい」

芳雄と和正は口をそろえて返事をした。

「しー……」

それを見て優奈は人差し指を立て嗜めた……。

わからないところを質問し、解法を教えてもらう。自分一人で答えるにらめっこしている時よりずっとわかりやすかった。

「でね、この流れで今はくしている、かつてくしていたっていう感じの意味なの」

自力の訳だと、時系列があやふやな暗号だったのに、優奈に言われる通りに訳すことで意味が通る。

「さすがだな。優奈の教え方だとよくわかる」

「えへへ、感謝してよね」

にこりと笑って胸を張る。昔は和正の後ろで引っ込み思案に隠れてばかり居た優奈が、今は胸を張って自分を誇示していた。

和正は引け目を感じつつ、視線をノートに落とす。そして英単語を調べようとして辞書に手を伸ばす。

「あ」

辞書がテキストを押してしまい、床に落ちた。

「ごめん」

急いで拾って優奈に返すと、その内容がちらりと見えた。

それは和正の知らないテキストで、内容もかなり難しそうだった。

「これは？」

試験対策は手書きのコピーで、今のテキストは明朝体で手書きではない。

「ああ、これはゼミのテキスト。さっきまでしてたから」

「そうなんだ」

視線を文雄と千絵に向けると、二人も同じようなテキストを持っていた。

「どうかしたか？」

文雄がその視線に気づいて手を止める。

「筒井も同じゼミに通っているのか」

「ああ。僕達は同じゼミだよ」

「あたしだけ進学クラスで、二人とも特進クラスだけだね」

千絵は色の違うテキストを手を言う。

「相沢さんも来季は特進に来れるようになって、一緒に勉強してるんだ」

「へえ……」

千絵は優等生というほどでもないが、学年でも上位の成績をキープしている。そんな彼女でも文雄達のランク下であり、今も上を目指して勉強をしている。

文雄の言動から浮き沈みのあるクラス分けたと予想できる。当然、優奈も特進とかいうクラスに留まる為に勉強をしないといけないわけだ。

「すまん、俺、用事思い出したわ」

和正はそう言うと、そそくさと勉強道具をしまう。

「え？ なにかあったの？ 私も行こうか？」

「いや、いいよ。水泳部の先輩に鍵返すだけだから。最近、俺ばっか後片付けしてたから、先輩に返すの忘れてたんだわ」

「そう。じゃ、仕方ないかしら。またね」

「ああ、ありがと。ほら、芳雄も行くぞ」

「え？　なんで俺まで？」

「いいから来いよ。勉強は後でもできるだろ」

「出来ねーよ。今逃したらいつ市川さんに教えてもらえるんだっての」

「私は逃げないよ」

優奈はくすくす笑いながら手を振る。

「うう……。しかたねーや。市川さん、ありがと。またお願いしますね」

平身低頭でお祈りじみた仕草をしつつ、芳雄は引きずられて行った。

「騒がしい奴らだな……」

文雄はちらりと見たあと、すぐに千絵に向きなおった。

十

「……ねえ、優奈はどう思う？」

「え？　なにが？　次のテスト？」

「ちがくて、水泳の授業中のアレ」

「ああ、ええと……」

優奈は言葉が選べず、困っていた。

「アレって？」

「女子更衣室に誰が入ったって事件よ」

水泳の授業の時に起きた事件は男子に伏せられている。文雄が知らなくても無理はない。そして人の口に門戸は立てられず、おしゃべりな子によって広まっていく。

水泳の授業中、女子更衣室に誰かが忍び込んだ疑いがある。

授業後に着替えに戻ると下着の順序が逆になっていることに気付いた子が居り、よくよく調べてみると、制服のリボンがほどけていた子が居た。

下着だけならただの勘違いだったともわからないが、リボンは明らかに人為的な操作が行われた証拠。

事件の報告を告げられた体育教員は「床に落して間違えて入れ替わったのではないか」と尋ねたが、埃なども付いておらず、そういう様子はない。

誰かが授業中に抜け出して下着に悪戯をしたのではないかと、となり、事実確認の為に生徒の何人かが残された。

それが自習になった真相だ。

「怖いよね」

「うん」

優奈は頷き、スカートをおさえる。

「なんかブルマ盗まれたって言うし……」

女子の体操着はスパッツとブルマが選択できる。

スパッツは身体のラインや生理ナプキンがあらわになってしまう。その為、敬遠する子も多い。他にもスカートのサイズを短くするのが流行っているためか、スパッツがスカートから見えて格好悪い。

ブルマの場合だと、少し大きめのサイズであれば野暮ったさはあるものの、制服からはみ出さないこととお尻の大きさを誤魔化せることから愛用する子が多い。特に体育のある日などは終日穿いていることもある。事実、椅子に座り直す千絵のスカートからはブルマがはみ出すが見えた。

「そうだったんだ」

「誰だろうね、犯人」

千絵は勉強の手を止めて呟く。

「あのさあ、水泳の授業中に抜け出たのって田所でしょ？」

「田所君が……」

「うん。先生に頼まれて時計取りに行ったみたいだけど、変に時間かかってたし、水泳部の部室の方に行ったんでしょ？　なんか怪しいよね」

「そうかな……。田所君は水泳部だし」

「そう、それ。水泳部だから鍵持ってたんじゃないの？　さっきも鍵返してないって言ってたでしょ？　すごい怪しいよね」

「……」

「でも、田所君が、まさか……もし本当に田所君なら、いつだってできるんだし……」

「かろうじてフオローをしようとする優奈だけれど、千絵は断然和正が怪しいと睨んでいて、首を振って否定する。」

「だからこそしたのかもよ？　水泳部女子のを狙ったら部員がまず疑われるけど、授業中ならできるし」

「そんな、そこまでするわけないよ……」

「するよ。現に誰かがしてるんだから。だからブルマ無くなった人いるんじゃない？」

「そっか……」

和正と言いつ切る理由は無いけれど、和正ではないとも言いつ切れない。全ては憶測ながら否定できず、優奈は悲しそうに俯いていた。

最近、付き合いの悪くなった和正。何事にも後ろ向きで消極的で、やらないことを正当化している。そのくせ、春子にはべったりして優しい。そう思うと気持ちが悪くもやもやする。

「……相沢さん、勉強をしないなら、今日はもう」

「あ、ごめんごめん。ちょっと気になってたから……」

千絵は平謝りをするが、勉強をする雰囲気でもなくなる。それを察してか、優奈も文雄もペンを置く。

「……えと、ちょっと用事思い出したから……」

おかしいな雰囲気にしてしまった気まずさから、千絵はこそそと帰っていく。

「ふう……。相沢さんはやればできるのに、どうも集中力がね……」

文雄はやれやれと肩を竦めると、塾のテキストを眺める。

「市川さん、この問題なんだけど……。市川さん？」

「え？　あ、うん。なに？　ごめん、聞いてなかった」

「やっぱり気にしてるの？　事件のこと」

「……うん。ちょっとだけね。でも、それよりも……」

「何か困ってることでもあるのかい？　僕でよかったら相談に乗るよ？」

「相談なんて……。全然、個人的なことだし……」

「個人的なことか……。やっぱり田所のことかい？」

「……わかる？」

「そっか。いや、君はまだ田所君に同情してるんだなって思ってる」

「同情なんて……。別に……。そうなのかな……」

「そうだよ。さっきだって勉強を見てあげて、その間、君の勉強は進んでないでしょ？」

白紙のままの解答欄を見れば、和正の面倒を見ていたことで進んでいないのは明らかだった。

「勉強を教えるのは確かに実力がつくけれど、それはあくまでもレベルが近い場合だよ。相沢さんみたいに、ある程度できた上で教えてもらいに来る子ならともかく、田所みたいに全部人任せじゃ意味がないよ。それは彼の為にも、君の為にもならない」

「……うん。それはわかるけど……。でも、他に……」

「他になにかあったかい？ 合唱じゃないし、何が……」

「……私ね、昔から田所君と仲良くやってきたと思うの。幼稚園の頃はいつもかず……田所君と一緒に遊んでくれたし、鬼瓦校でもいつも私のこと気に掛けてくれたし……」

「ふうん。ああ、幼馴染だったもんね」

「うん。でも、去年からかな？ んー、去年はそうでも無かったんだけど、今年に入ってから変によそそしいっていうか、中間テストの時も全然だったのに、せっかく勉強教えてあげるって提案してもあんなふうにさ……」

「そうだね。なんで急に帰ったんだろう。何か、やましいことでもあったのかな？」

「……やましいことなんて、ないよ」

「ああ、ごめん。相沢さんの話を聞いちゃって、つい」

「……うん」

「でも、田所にそんな気を遣う理由なんてあるのかい？ そりや、昔は市川さんのことを助けてくれたのは事実みたいけど、彼の方が君から離れて行こうって気がするんだよね。言い方は悪いけど、市川さんを疎ましいって感じてるんじゃないかな……」

「私ってうざいのかな……」

「僕はそんなふうに思わないけど、そういうのってあるんじゃないかな。ほら、昔は自分の後ろで自分を頼ってきた子が、いつの間にか自分に上から教えるようになった。そういうのって自分に自信の無い奴は堪えるんじゃないかな」

「上から目線っていうつもりじゃ……」

「いや、上から目線っていうか、実際、市川さんの方が上だし、勉強でも鬼瓦第二校での活動内容でも評価されてる。彼は、まあ、水泳はできるかもしれないけど、市内の大会で入賞する程度だろ？ んー……、やっぱり市川さんに劣等感を感じてるんじゃないかな」

「田所君が劣等感を……私に？」

「そういうのあると思うよ。自分より下だと思っていた人に進学をきっかけに抜かれて、現実を見せられて、それで落ち込んでしまう。やる気のある奴なら、そこで発奮して、見返してやろうって思うんだろうけど、彼の場合は逃げ癖があるっていうか、できないってことから目を背けちゃうじゃないかな。合唱の時もそうだった。楽譜読めないからって、調べもせず、そのまま参加しなかったよね」

「それは、浜崎先生も……」

「それにさ、言いくいけど、最近、よく北村さん？ だっけ？ 彼女と一緒にいるじゃない？」

「うん……」

英語の時間、掃除の時間によく見かける光景。春子の傍に和正が居り、ペアで会話して、掃除も一緒に、仲良くバケツを運んでいる。違う掃除の班なのに……。

「それってさ、市川さんが自分を越えちゃったから、別の奴探してるんじゃない？」

「別？ なんの？」

「代理ミュンヒハウゼン症っていうのかな？ 自分の子供とか被保護者を世話して、周りや自意識で自分を良く見せようっていう振る舞い」

「……聞いたことあると思う」

「完全にそれってわけじゃないけど、今の北村さんって、クラスでハブられているとか、浮いてる。それは彼女の態度に問題があるけれど、そういう弱い立場に居る人を守って、ナイトにでもなったつもりなんじゃないかな？」

「田所君が？ どうしてそんなこと……」

「市川さんを庇えないどころか、最近逆は逆に助けられている。彼の精神年齢は全然子供だからね。自分より下だと思っていた、しかも女子にへいこらへつらっているのが嫌になったんだよ。そして、市川さんの代わり

に庇ってあげていい気になれる北村さんに優しくしている……っていうこと」

「……田所君は優しいところあるし……」

「そうかな。彼は乱暴なところあるし、それなのに、大崎や笹井には何もやり返せない。そういう卑屈なところあると思うよ」

「……」

昔は確かに喧嘩っ早いところがあった。それがいつ頃からか、控えるようになる。この前の浩司とのいさかいでも、彼は手を出さなかった。

最初は人として成長したのかもと思っていたが、逆に考えれば泣き寝入りを覚えただけかもしれない。

「彼は彼の自尊心を守るために必死なんだろうな。小さい男だよ」

「……」

「ああ、ごめん。市川さんにそんなこと話してもしようがないか。でも、それで市川さんが悩むのも違うと思うんだ。君は頑張ってるし、勉強でも、行事でも負けないように戦ってる」

「私が？」

「ああ。今は勉強ぐらいしかやれることがないけど、そういうのだって戦ってることなんだ。学生の仕事は学業。今できることと向き合って自分を鍛える。それが僕らにとって戦うってことだよ。市川さんは戦えるし、問題が起きた時、それと向き合える人。だから一緒に居て勉強になるよ」

「ぎこちなく笑顔を向ける文雄。その言葉に気持ちが楽になる。」

なんとなく委員長に抜擢されて、なんとなく合唱を頑張ってる……。

そういう時間の過ごし方を一緒に見て、取り組んできたのが文雄。結果は残念だったけれど、それを糧に先に進めるはず。今だって特進クラス維持の為に一生懸命勉強できている。

ゼミは鬼瓦第二校と違って厳しい。他の所から頭の良い子を集めて競う厳しい世界。そのレベルを維持するのは並の努力ではできない。それをしている自分と文雄。

——自分達は頑張っている！！

「うん。ありがとう。なんか気持ちが楽になったよ。やっぱ、誰かに相談するっていいね。あ、でも、私ばかり相談してる気がするかな？ えへ。たまには筒井君も相談していいかな？ なんて……」

気持ちが軽くなるとついでに口も軽くなった気がする。少し調子に乗り過ぎたと思ったのは、文雄が少し面食らったのを見たから。

「ごめん、そんなに驚かなくてもいいじゃない……」

唇を尖らせて抗議する。けれど文雄は照れた様子で頬を掻く。

「そう？ ええと、僕も少し悩みっていうか、あるんだよね」

「なにに？ 私で相談に乗れること？」

「んーと、僕ってなんか人見知りっていうか、人と壁を作っちゃうっていうか」

「え、そんなことある？ 筒井君ってだれとでも普通に話してる気がするけど……」

「それが、そうでもないっていうか、僕もどこか他人行儀が抜けないっていうか……」

煮え切らない態度の文雄に優奈は一步踏み出す。

「他人行儀かあ……。んー、そういえば、いつも、誰に対しても苗字で呼ぶよね。そういうのが確かにそうかも……」

「うん。僕も直したいと思うんだ」

「じゃあさ、これからは身近な人を名前で呼ぶとか？ 私とか千絵を優奈さん、千絵さんってさ」

「名前で呼ぶのか……。うーん、ハードル高いなあ」

「だめだよ。そういうのから逃げちゃ。最初は照れるかもしれないけど、じゃあ、ゼミとか一緒に勉強する時から少しずつ練習するとか？」

「いいのかい？ なんか皆から変に見られるような気がするんだけど」

「そんなことないよ。私だってよく……。とにかく、それぐらいのこと気にする必要無いよ」
口ごもるも首を振り、文雄を促す優奈。

「えっと、ゆう……。なさん？」

「なあに、文雄君」

笑顔で言い返す優奈に文雄は真っ赤になる。

「……なんだか慣れないな。やっぱりいつも通り市川さんのほうが……」

「だめだよ。そうやって逃げちゃ。文雄君も自分の言ったことを実践しようよ」
相談に乗ってもらったお礼というかお返しというか、優奈は強引に押しきる。

「うん、市川さんの言うとおりで。僕も頑張らないと」

「また市川さんだって」

むっとして頬を膨らませて抗議すると、文雄は珍しく口元を歪めて舌を噛む。

「あ、ごめん。優奈さん……」

「うん、よろしい」

ぎこちなさの残る中、文雄の新たな一面が見えて新鮮だった……。

時計が四時半を過ぎた辺りで勉強道具を片づける。そろそろ家に帰る時間だった。二人が図書室を出る頃には図書委員ぐらしいしか居なかった。

優奈は机の上の消しゴムのカスをノートで取り、ゴミ箱へ捨てる。すると勢い余ってノートが落ちてしまう。

「あーもう……」

ゴミ箱をひっくり返すわけにもいかず、右手を伸ばす。

「……でさあ、この前、先輩がさ……」

「……ああ、聞いたよ。また彼女に振られたんだろ？ だっせーよな」

「……お？ なあ、大吾、あれ……」

「……お、まじか……」

ゴミ箱と身体の角度を斜めにしてようやくノートに手が届く。そのまま引っ張ろうとしたところでオシリが涼しい。



何か後ろに気配を感じるけれど、何が起きたのかわからない。とりあえずノートを引っ張りだして身を起こすと、いつの間にか大吾と浩司が居た。

「へへ」

「委員長、どうかしたの？」

二人はにやにやしながら優奈を見ていた。

「ん？ えと、ノートがゴミ箱に落ちちゃって、それで取ってたの」

「ああ、そうだったんだ。へえ……」

「委員長ってさ、かわいいね」

「え！ あはは、そう？ 恥ずかしいな」

「おっぱいおっきいしかなり女してっけどさ、まだまだそういうところあるんだな」

「もう、からかわないでよ」

胸元を手で隠してむっと睨む。そんなことで怯む二人ではなく、へらへらと笑いを浮かべていた。しかも、よく見るとズボンの前が不自然にとんがっている。

男の生理現象を全く知らないわけではないけれど、特に意識することも無い優奈は視線を逸らし「ノートノート」と鞆に駆け寄る。

「……どうかしたのかい？」

「んーん、なんでもないよ。それじゃあ大崎君、笹井君。さようなら」

「おう、じゃあな」

「カワイイクマさん、また明日」

去り際に聞こえるように浩司が言うと、優奈は真っ赤になる。

「クマさん？」

「なんでもないよ。行こう、文雄君」

優奈は文雄の手を引っ張ると廊下を走る。

「わわ、優奈さん、待ってよ」

よろめきながら走る文雄だった。

「……優奈さん？ 文雄君？ あいつら、そんな関係だっけ？」

浩司はちらりと後ろを振り返り、訝しみながら顎を摩っていた……。

和正が部室へ向かうと、まだ着替えもしていない部長が居た。

「あれ、何してるんですか？」

「ん？ ああ、和正か。トラブってさ」

「トラブル？」

「なんかさ、水泳の授業の時に部室に入った奴がいるんじゃないかってさ」

「授業中に水泳部の部室に？ つまり……」

女子更衣室として使われている部室に侵入した者が居る。その目的がただのイタズラでないことは和正でも知っている。

「なんかさ、ブルマ？ スパッツかなんか知らないけど、盗まれたんだってさ」

「まじですか……。そんなことがあったなんて」

「でさ、んゝ……言いにくいんだけど、この鍵の管理って俺らがやるじゃん？」

「はい」

「だからさ、ちょっとね、事情聴取というか、鍵の管理について尋ねたいことがあるって言われて、今日は練習どころじゃないんだ」

「俺達が疑われているんですか？」

「平たく言えば」

「そんな。だって、授業中ですよ？ ありえないじゃないですか」

「まあな。俺らも授業中に抜け出すようなことしてないけど、でも、実は誰かとグルで、鍵を渡していたとかさ」

「だから鍵を？ じゃあ、鍵を管理していたのは……」

「……言いにくいんだが、最近、鍵を頼んでいたのは」

じっと和正を見る部長。

「俺ですわ」

「だろ？ だからさ、ちょっと話を聞かせてってことらしいんだ」

「俺は昼に体育の先生に聞かれましたよ。でも、その時は先生に時計取りに行けって言われただけで……」

そこまで言って口ごもる。犯人に協力者がいれば、和正の役割は鍵を渡すだけで良い。授業を抜け出すかどうかは関係無いことになる。

「それにしても、俺が疑われてるってことですか……」

頭をがんと殴られた気分だった。和正はよろけて部室の壁にぶつかる。

「いや、俺も和正がそんなことするとは思わないよ。だってなあ」

そう言い切るにしても部長は和正との付き合いがそれほどない。彼の成績こそ部を盛り上げる要素ではあるものの、一人で練習に没頭する和正は底えるほど親しさが無い。

「仕方ないっすよ……」

「あとな、言いにくいんだけど、この前、お前が鍵返したよな？ そんな時から、鍵が見当たらないんだってさ」

「え、じゃあ、どうやって今日は鍵を？」

「スペアキーを使ったんだと。なあ、和正、ちゃんと鍵返したよな？」

「返しましたよ」

「誰に？」

「俺が職員室行った時は担任の浜崎先生が居ました。試験近いから入れないので、先生に鍵を渡しました」

「そっか。じゃあ、浜崎先生に聞いてみるか。よし、ちょっと行くぞ」

部長は和正の肩を押す。普段はへらへらというか飄々とした人だが、今、肩を押す力だけは有無を言わさぬものがあつた。

「……私が鍵を？ なんの事かしら？」

法子に鍵の返却の件を尋ねるも、彼女は素知らぬ風だった。

「だから、水泳部の鍵を返したじゃないですか」

しらばつくれる法子に和正は語気を荒めて詰め寄る。

「水泳部の鍵をどうして私に？ 水泳部が管理するんだから、自分で返さないでだめじゃない」

「試験が近いから職員室に入れなくて、それで先生が居たから頼んだんじゃないですか」

「知らないわ。田所君の勘違いじゃない？」

「勘違いなんかじゃないです。俺はちゃんと渡しました」

「ちよっと、声が大きいわ。職員室では静かに」

「話をそらさないでください。先生はなんでしらばつくれるんですか」

「しらばつくれるなんて……。それに、その日の当直は杉田先生よ。私に頼まれても困るわ」

「はあ？ 何言ってるんですか。当直とか関係無しに、先生が受け取ったんだから、先生が責任を持ってくださいよ」

「……それはおかしいわ。水泳部の部室の鍵は水泳部が管理する。返却までが管理なのに、誰に渡したかもちゃんと覚えていないし、キーホルダーに掛けてないのなら、貴方にも問題がある」

「だから、職員室への入室禁止なんだから頼んだんじゃないですか」

何度もループする話に和正は苛立ちからか語気が強く、早口になる。

「田所君、おちつきなさい。早口で何を言っているかわからないわ。説明する時は、しっかりと順序だてて、まとめて、聞く人に伝わるように話さないで。君のレポートはいつも主題がわからないし、何が言いたいか全然つたわりません。そういうのが普段の説明にもみえます。もう一度、しっかりと経緯を説明してください」

「だから……」

周りに聞こえるように歯ぎしりして法子を睨む。

部長も同じ話のループに頭を掻き、半眼になって二人をみていた。

「つまり、浜崎先生は鍵を受け取ってないと言って、和正は鍵を浜崎先生に渡したって思ってるわけか……。で、結局鍵は無い……」

「そういうことね。でも、田所君は普段から嘘をつくし、自分に都合の悪い事はすぐに黙り込む。それになくなったのは女子の……」

言いかけて言葉を飲み込む法子。和正の目がかっと開かれていたから。

「今こうして話しても水掛け論にしかありませんし、もう一度、部室を探してきます。顧問とも相談してきます。失礼しました」

部長は軽く頭を下げると、背を向ける。

「……」

和正はまだ何か言いたかったが、部長の言うとおりに水掛け論でしかないと思を返す。

「田所君、君、失礼じゃないかしら？」

「……失礼しました」

振り返らずに言い捨て、部長を追った。

「変な先生だな」

「……俺、ちゃんと返しましたよ」

「……んー、俺はどっちの言うことが正しいか、判断できる立場じゃないというか、なんとか悪魔の証明というか……」

「先輩はどっちの味方ですか!？」

はぐらかそうとする態度に和正の怒りは部長に向かう。

「落ち着けて。頭に血がのぼっても良いことないぞ?　　というか、むしろお前が怒れば怒るほど、お前の立場が悪くなるんだよ」

「でも」

「でもクラシーもねーよ。つか、鍵が見つかるまで水泳部活動できないし、どうしたもんかな」

「そんな……」

「しゃーねーよ。泣く子とヒステリー女には勝てない。ま、試験近いし、和正も補習にならないようにしっかりやれよ」

「……」

「腹立つのはわかってどさ、我慢しろよ。そのうち鍵が出てくるかもしれないし」

「……先輩はいい気なもんですね」

「そうさなー。とりあえず今日はもう帰るか?　顧問に話しても和正と浜崎先生じゃ、どちらの言い分信じてもらえるかわかりきってるし。鍵のことは一旦行方不明のままにしておこう」

部長はそう言うど部屋と逆方向へ行く。部屋棟の方にはもう誰も居ない。

和正は今日の練習はお流れと見て、試験も近いことから帰ることにする。

自分は絶対に返したし、その記憶がある。あの時、法子は電話をしており、そのことで忘れていたのではないだろうか?　そのことをもっと強く指摘していたら?　だが、彼女がそれを頷くかといえればそれもわからない。彼女こそ、自分の都合に合わせて話を変えるのだから……。

悔しい気持ち胃の中で渦巻く。けれど、いくら叫んだところで和正が盗んだことを誤魔化す為に嘘をついた、もしくは勘違いをしていると言われる可能性の方が高い。

提出物・宿題忘れや合唱練習への不参加など、生活態度も悪い和正は分が悪い。

怒りで腹がねじれそうな気持ちをおさえ、その日は帰宅するしかなかった……。

週末に向けて期末テストが始まる。

教室では開始までのたった五分でもあがこうと、事前に言われていたヤマを見直す。

そんな中、和正はノートを睨み付けていた。

文字を追うけれど頭に入っていない。はっと気づいて最初に戻り瞬きして読み直す。その繰り返しで遅々と進まない。

盗難事件、その犯人として自分が疑われていることが原因だ。

芳雄は「和正にそんな度胸も計画性も無い」と言ってくれるが、周りはそう思ってくれない。噂によれば優奈も被害に遭っていたらしく、そのことも腹立たしい。

「文雄君、こんなだけ……」

「そこは定型文だから、そのままの訳し方だとおかしくなるよ。確かゼミのテキストで……、ここにあるよ」

「ありがとう」

「どういたしまして、優奈さん」

それとは別に最近、文雄と優奈の関係の変化が気になった。

これまでは筒井君、市川さんだった呼び方が、いつの間にか優奈さん、文雄君になっている。

芳雄に言わせると委員長として「緒なこと、塾でも自習でも「緒にいるのだから、それほど不自然でもないと言われた。その後「ただ……」と何か口ごもるのが鬱陶しかった。

「……」

名前で呼び合う二人が面白くない。そういう感情が嫉妬なのかと思うと、三月の決意が揺らぎそうになる。

「……」

もう一度ノートを睨む。その内に教員がやって来て、荷物をロッカーにしまうように言われた……。

勉強はしたがヤマを外していた。それ以上に身が入らなかったのも大きい。次週に返されたテスト結果に、和正は頭を抱えていた。

廊下に補習予定が張り出され、和正は部活との兼ね合いを見てため息を付いていた。

「おいおいおい、赤点ばっかじゃないか。こりゃあ夏休みも学校に来れるね。やったね」

芳雄もいくつか赤点を抱えていたが、和正ほどではない。

「うっせーな。色々あったんだよ」

「……そうだな」

事情を知る芳雄はそれ以上からかうことはせず、腕を組む。彼にも思うところがあり、盗難事件について精査すべきではないかと提案していた。

和正に掛けられた嫌疑を濡れ衣と言うが、周りはそう思ってくれない。かといって犯人も見つからず、大した情報も無い。

そんなグレーな決着にも関わらず、和正を見る視線は厳しいものがある。それが他人ことながら、納得いかないらしい。

「なあ、もう一度先生に聞いてみようぜ」

芳雄は何度目となる提案を口にするが、和正はどうしたものかため息を漏らす。

「つつてもな、もう時間もたってるし……」

まだ噂は根強いものの、和正への疑惑のまなざしは強い。女子の数名は法子に直訴し、はっきりさせるべきだと提言していた。いつもの法子ならホームルームを使って話し合いをして、レポートを求めるのだが、試験前だからと特に時間を取らなかった。

中間テストの時は平気でホームルームを潰していたので意外でもあった。

「今更何を調べるんだ？」

「ん〜……。例えば、鍵の所在とか、授業を抜け出した人とか……」

「そのどちらにも俺が関わってるんだよ」

「それはそうだけど、他にも何人か居たんだよ。ほら、大吾と浩司は腹痛いとか言ってさぼってたし、何度かトイレ行ってた。他に保健室行った人もいるし」

「……そんなに居たの？」

体育の教員は真面目でさぼりを許さない人だが、こと水泳に関しては神経質なところがあった。

水泳前は水、水中、海、川の危険性を説くために授業一時間を使って説明する。洗面器に張られた水ですら人間は溺れると力説するので一時期洗面器に顔をつけるのに躊躇する子もいた。

全身運動故に筋肉がつることもあり、準備運動を念入りに行い、体調不良の場合は基本見学をさせる。

その心配性を悪用してずる休みをする生徒もいるが、たいていは水泳の授業の方が楽しいので男子は基本参

加していた。さぼるのは浩司や大吾のような不良ばかりだった。

「うん。ええと、五十嵐に大崎に笹井と、谷町、緒方……」

「谷町が？」

クラスでも真面目な部類に入る地味な谷町の名前が出て意外に感じた。

「ああ、あいつはなんか足切って保健室行っただけだよ。プールサイドに上がる時にずるってさ」

「まじか……痛そうだな」

生々しい言い方に怪我の様子を想像してしまう。水泳でふやけた皮膚がコンクリートに引っかかって切る事故は多く、他人事ではない。

「それを連れてったのが筒井かな？」

「……意外と多いな」

「まあな。だからさ、本当は皆にもしっかりと聞いておきたいんだよ」

「んでも、犯人がクラスに居ると思うのか？」

「そうは思いたくないけど、一度しっかりとクラスの中に犯人はいませんっていう終息宣言っていうのかな？　そういうのした方がいいと思うんだ。そのためにも一度先生に頼みたいんだよな」

彼なりに真剣に考えていることが意外だった。普段からのほほんというか要領よく過ごす彼ならなあなあにやり過ごすことを好みそうだったから。

失礼な感想を抱いていたことを心の中で反省し、手を合わせる。

「……なんだよ」

「いや、なんでもない」

「まあいいや。一応、五十嵐辺りから聞いてみるか」

「本当にやるのか？」

「夏休み前にな。じゃないと忘れちゃうだろ」

「それもそっか」

都合よく五十嵐も補習があるらしく、日程表をメモしていた。

「おーい、五十嵐、ちょっといいか？」

「なに？」

「なあ、この前の水泳の授業のことなんだけど、お前さ、授業中に抜けたよな。その時、なんかなかった？」

「え？　んー、少し前だしよく覚えてないかな。ええと、その日っていつもより消毒層の温度が冷たかったからかな、すぐおしっこ行きたくなったんだよね。だから、先生に言っただけでトイレに行ったよ。

校舎まで戻ったら、教頭先生に会ったよ。「君も？」って驚かれた。なんかあったかな」

「ああ、それは俺が時計取りに行ったときに会ったからだな」

「うん。でも先生に怒られるのも困るし、すぐ戻ったよ。そういえば谷町君も一緒だったかな。結構足痛そうだったから、肩貸してあげようかって言ったら平気だったよ」

「谷町と会ったんだ」

「そうだよ。「緒に戻ってきたけど、彼はそのまま見学だったね」

「はーん」

「ありがと。変なこと聞いたな」

「それだけ？　うん」

五十嵐は別の補習をメモしようとして、きろろきろろとしていた。

「次は谷町かな」

二人は教室に戻り、谷町を探した……。

サッカー部の谷町はグラウンドに居た。まだ怪我のせいでサポーターを巻いているのが見えた。

「おーい、谷町、ちょっといいか？」

「ん？ なんだ」

「谷町さあ、この前の水泳の授業で怪我したじゃん？ その時のことちょっと聞きたくて」

「どうもこうもねーよ。足からばーって血が出てびびったわ。んで、保健室に連れてってもらって松子先生に包帯巻いてもらって……。傷口見るか？」

サポーターを捲ろうとするので和正はぶんぶんと首を振る。

「そんなときって五十嵐と会った？」

「ん？ ああ。なんか居たな。トイレだっけ？」

「なんか言われた？」

「あいつはとろいけど優しいからなあ。肩貸してくれるって言われたけど、アイツと俺じゃ背が違うから、断ったぐらいかな」

「そんな時にアイツなんか持ってた？」

「？ ああ、別に何も？ つうか、俺もあいつもパンツ一丁だし、何も隠せねーよ」

「ああ、そうか」

「まあ、俺様はマグナムを隠し持ってるけどな」

「マグナム？ なんだそれ？ ガス銃とか？」

芳雄と谷町が笑い合っている中、和正がきょとんとして尋ねる。

「おいおいおい、なになって、まあナニだろ」

「だな」

二人は半笑いで流してしまふ。

「で、なんかあったの？ ああ、そういやなんかあったんだな。なに、犯人探しか？ 探偵マンガみたいだな」

谷町はリフティングを始めだし、器用にボールを操る。

「でも犯人なんて見つかるか？ ぶっちゃけ、俺が犯人だったとして、本当のことなんて言わないぞ」

「それはそうだろうけどさ」

「ま、白黒つかないままってのはいらいらするし、もしなんかわかったら教えてくれよ」

「ああ」

谷町は特に怒る風でもなく、そのまま練習へ戻った。

「あぶねーあぶねー。あいつ怒るかと思ったよ」

「これじゃお前が犯人じゃないかって疑ってるようなもんだからな」

のんきな五十嵐と違って勘の働く谷町に目的が見破られてしまった。証言を聞くにしても多少の疑いを含むわけで、聞き方にも注意をしないとイケないと反省する。

「さてと、じゃあ、次は……」

浩司と大吾はサボっていたが、ずっと見学席でおしゃべりしていた。

残りは緒方一人。彼を探しに体育館へ向かった。

バトミントン部の緒方は体育館で練習をしていた。

かなりのスピードで飛び交うシャトルの中、緒方を見つける。

「おーい、緒方ーちょっといいか？」

「……？」

練習中に声を掛けられたせいかな、少し不機嫌だった。

「なに？ 今練習中なんだけど」

「すまんすまん。ちよつと聞きたいことがあつてさ。この前の水泳の授業でさ、お前、途中で授業抜けたろ？ そのことで……」

「またか、……そのことなら皆に聞かれたよ。俺はずっとトイレに居たんだ。証拠は無いけどさ、俺は関係無い」

うんざりした様子で言う緒方はかなり不機嫌だった。

もともと交友関係の薄い仲であり、その上でブルマ泥棒の濡れ衣を掛けられそうになったことに腹を立てている。そこへさらに和正達が中途半端な形で蒸し返そうとしていて、我慢がならなかったようだ。

その視線には「和正がやったんだろ」と暗に告げており、和正も対抗して睨み返してしまう。

「わかったわかった。すまん。変なこと聞いて」

不穏な空気を察した芳雄は和正を止める。

「……は、くだんね」

緒方はこれ以上話すつもりも無いと背を向け、練習に戻る。

「おいおい、和正、相手怒らせるなよ。探偵失格だぞ」

「探偵じゃねーよ」

「とにかく、これじゃわかることもわかんねーよ……」

このまま居てもバトミントン部に怒られるだけと、芳雄は和正の肩を押す。

「……どうせお前がやったんだろ」

和正は振り返るが緒方は練習に戻っていた後だった。

とくに成果も無く教室に戻ってきた二人は、どっかりと椅子に座つたため息を付く。
下手な聞き込みをした結果、緒方を怒らせただけという散々な結末で満足できるはずもなく、ただ徒労感が募る。

「あーあ、どうなってるんだか……」

補習の日程と部活の日程を確認しつつ、ぼやく芳雄。

「ま、休み明けには収まってるだろ」

濡れ衣を掛けられっぱなしの和正が楽観的なことを言うので、芳雄も肩を竦める。

「お前なあ、そんな流されまくりな態度で世の中上手くいけると思うか？ そりゃ流れに合わせるのは大事だけどよ、お前の場合是不器用っていうかさ」

芳雄の言うことももっともだが、一生徒がどうにかできる問題でもなく、半ば諦めの気持ちもあった。

「俺としてはそれよりも部室の鍵が見つからないとな……」

鞆を取り、帰り支度をする。

部室の鍵がなくなったことで水泳の授業は一旦中止。水泳部の活動も禁止されている。大幅に予定が狂ってしまったことで和正は憂鬱な気分だった。

「……？」

鞆を背負い、変に膨らんでいることに気付く。

「おかしいな。こんなに荷物あったか？」

机に鞆を置き、留め具を外すとぱつんと弾けるように開いた。

「……？」

教科書の上から押し込まれている赤い布に見覚えは無い。なにごとかと引っ張ると、それはブルマだった。
「……おいおい、なんだよそれ」

「知らねーよ。っていうか、なんでこんなもんが……」

芳雄は眉を顰めてそれを見る。触ろうとして手を引っため、和正に裏返すようジェスチャーする。

「なんで？」

「名前名前」

なるほどと思い、裏返す。そこには市川優奈とあった。

「え……俺じゃねーよ」

和正は立ち上がり、裏返った声で言う。

「わかってるよ。そんなこと」

芳雄は冷静だった。先ほどまで鞆が普通だったことと、芳雄が居る状態で盗品を見せる必要が無いことから和正が犯人ではないと判断していた。

「俺達が外行ってる間に誰かが忍ばせたのか？」

「……そうなるよな」

突然のことに和正は情況が理解できなかった。

「とりあえずしまったらどうだ」

「どこに？」

「そりゃ、鞆の中？」

「それじゃまるで本当に俺が盗ったみたいじゃないか」

「そうだけどさ、そうじゃなくて、このままだと……」

「おい、それはなんだ！」

教室の入り口で文雄が叫ぶ。委員会の集まりで一緒だった優奈も居り、突然の声に驚いていた。

「田所！ それはまさか……優奈さんのじゃ……」

「え？ 私？ 何が……？」

ずかずかとやってきて裏返された赤い布を見る。裏地はメッシュとクロッチ部分に厚い白い布があてがわれている。そして洗濯マークにしっかりと市川優奈とあった。

「やっぱり君が犯人だったのか！ この変態」

「な、俺じゃない！ 俺が戻って来た時に鞆の中にあっただ」

「そうだよ。俺もさっき見た。教室出る前は無かったのに、戻ったら入ってた。俺達の留守の間に誰かが入れたんだよ」

「そんなことする奴が居るか！ 君が盗ったんだろ。二人でそれを……ああ、そういうことか。田所が鍵を渡辺に渡して盗んだんだな」

「文雄君？ どうしたの……え……」

三人の言い合いにおそろのおそろ優奈がやってきて、その中心にあるものを見て言葉を失う。

「え……これって、私のブルマ……なんでここに？」

「田所が盗ったんだ」

「俺じゃない！」

「じゃあなんでここにあるんだ！ 説明しろ」

「それは、わからない。さっきも言ったが、俺が戻ってきたら、鞆に入っていた」

「君が入れたんだろ」

「違う！」

「じゃあ誰が！」

「それはわからない」

「ほーらやっぱり！」

「だから、違う！」

「君達二人が共謀してやったんだ。最低だな！」

「だから、違うって言ってるだろ！」

和正は思わず文雄の胸倉を掴む。

「ひ……」

「やめて！」

文雄を掴んだところで優奈が間に入る。仕方なく手を離すが、気持ちが高ぶって巧く言葉が出ない。

「とにかく、みんな落ち着いて。冷静になって話し合おうよ。田所君も、文雄君も、渡辺君も……」

優奈は三人を落ち着くように言い、机の上にあるブルマを取る。

「……」

無言で交差される視線。文雄は二人を睨む。

「……私のが、どうして田所君の鞆にあったの？」

改めて和正に問いかける優奈に、彼も一息ついて気を落ち着かせる。

「俺が戻ってきたら、鞆にあった。それで取り出したところに二人が来た」

「……うん。そうなんだ」

「本当だよ、市川さん。なんなら俺達がさっきどこに居たかとか、緒方とか、谷町に聞いてくれよ。サッカー部とバトミントン部に行ってたんだ」

「そんなのがなんの証拠になるんだ」

「なるだろ！俺達は犯人探しをしよう」と二人に話聞きに行ったんだ。もし、俺達が犯人なら、こんなところを出したりしねーよ」

「どうだかな。教室で誰も居ない時を見計らってたんじゃないか？」

「いっただれが来るかわからないのにそんなことするか！」

「やめて！文雄君も渡辺君も……」

「……とりあえず先生に報告しないと……」

「ああ。見つけたんだからな。どうする？俺も行くか？」

「……君が来てもなんの意味も無いだろ。言い訳をする気か」

「委員長、和正はやってないって」

再び掴みかかりそうな勢いになったところで優奈が鼻を鳴らす。泣きそうな彼女は唇をゆがめながら必死に

こらえていた。

「うん。とりあえず先生に報告しないと……」

「ああ。見つけたんだからな。どうする？俺も行くか？」

「……君が来てもなんの意味も無いだろ。言い訳をする気か」

「委員長、和正はやってないって」

再び掴みかかりそうな勢いになったところで優奈が鼻を鳴らす。泣きそうな彼女は唇をゆがめながら必死に

こらえていた。

「ごめん、今はなんかわからないし、とにかく、後で先生に報告しておくから、だから、いまは……」

「優奈さん……」

「市川さん……」

発見されたからといって解決とは言い難い。特にクロッチの部分が黄ばんでいることから、何かイタズラを

されているような気配がある。

性的な目的で盗まれたことは明らかであり、和正が犯人でないとして、学校関係者の中に居ることも明らか

だ。

恥かしさと悔しさと混乱で優奈はこらえきれなくなり、背を向けたまま、肩を震わせる。

「私、先に帰るね……」

「優奈……」

悲しそうに教室を出る優奈を見て、和正は取りすぎる。

「送ってくか？」

「いい、一人で帰るから……」

首を振る優奈にそれ以上言えず、和正は去っていく彼女を見送るしかできない。

「……ふん」

文雄は二人を睨み、教室を出ていった。

残された二人は突然の出来事に精神的疲労を抱え、どきっと椅子に腰かける。

「なんだってんだ、一体……」

「さあな。つか、本当におかしいぞ……。なんで和正ばかり、変な目に遭うんだ？ お前、呪われてるんじゃないか？」

「誰に？」

「さあな。市川さんを好きないろんな奴じゃないか？」

「……なんで俺なんだよ」

「そらそうだろ。お前、去年、市川さんとべったりだったじゃん。だからいろんな奴から嫉妬されてんだよ」

「そんなもんなのか？」

「ったく、これだから童貞は……」

「お前だって」

「……」

しばしの沈黙が訪れて、互いに掴み合い、苦笑する。

「あーあ、どうすんだよ。またこんがらがっちゃったぞ？」

「だな。っていうか、なんかお前まで共犯みたいな扱いされてたな。なんかすまん」

先ほどの文雄の剣幕から考えて和正はふうと息を着く。自分だけならともかく、たまたま居ただけの芳雄が疑われることが辛かった。

「それは、仕方ないか。っていうか、委員長、なんであんなに青筋立てて怒ってんだよな。変だよ」

「優奈前にしていいとこ見せたかったんじゃないか？ もしかして、あいつも優奈を狙う一人とか？」

「はは、ありえるかもな。冗談はおいといて、どうする？ 根回しっていうわけにもいかないし……」

「無理だよ。俺らがいくら言おうが、筒井が相手じゃ信頼が違う。それに俺の鞆からでたのは真実だし、ばつちり見られた。言い訳のしようがない」

「なんだよ、諦めモードか？ もっとこうなんか、例えばDNA検査するとか！」

「おいおい、DNA検査してなんになるんだ？ どうせ出るのは優奈のだけだろ。というか、そういうデリカシーの無いこと言うなよ」

半ば怒りながら声を荒げる和正。ブルマの黄ばんだ汚れはつまり、彼女のもの。それを揶揄するような芳雄の提案にいらだっていた。

「え？ なんで？ だって犯人のだろ？ あれ」

だが、当の芳雄は意外そうに和正を見る。

「え？ え？」

顔を見合わせ、しばし戸惑う二人。

「いや、あれはだってなあ……。精子だろ？」

「精子？ 精子って白だろ？ なに言ってるんだよ」

「ちげーよ。乾くと黄色くなるんだよ。お前、なにかまるとぶってんだよ」

「そうなのか？」

「あー、なるほど。いつもすぐティッシュに丸めて捨てて我が子を顧みないタイプか」

「お前ティッシュで拭くだけ？ 風呂でパンツ洗うんじゃないの？」

「普通拭くだけだろ……って、ああ、お前、本当にわかってないのか……」

「何がだよ。ばかにしてんのか」

かみ合わない話によくやく合点がいった芳雄はくくっと笑う。

「まあ、それはいいか。現実的な方法じゃないな。ええと、なんつうか、夏休み前に頭の重い話だな」

「そうだな」

ふっと吹く風に気付き、和正はベランダの戸を閉める。

「開いてた？」

「閉め忘れたんだろ」

開けっ放しの窓を閉めようとするすると下校する生徒が見えた。部活に勤しむ生徒に紛れ、隣り合う二点。片方は男子でもう片方は……。

＊＊

試験結果もさることながら、優奈のブルマが入れられていたことに腹が立った。

盗んだのが誰かはわからない。だが、悪意を持って自分を貶めようとしている。

クラスで嫌われていることは自覚しているけれど、その為に優奈を利用してきたことに腹が立った。

自分を攻撃したのであれば自分だけを狙えと言いたかった。優奈を利用する犯人の狡さがむかむかした。

母にテスト結果と補習の予定を話すとちまちま怒られたが、放課後の出来事が顔に出ているせいかな、逆に心配されてしまった。

今回は反省していると消沈した面持ちで伝え、自室に戻り、ベッドで大の字になった。

「……なんだってんだ、いったい……」

目を瞑ると先ほどのことがぐるぐる回る。

誰かが自分を陥れようとしている陰湿な悪意を感じる。

芳雄の言うとおりに、犯人探しをした方が良いのかもしれない。相手が何かアクションをするのであれば、何かしら痕跡を残すはず。例えば鍵にしても指紋が残るなど……。

「はは、ばかばかしい」

刑事ドラマでもあるまいしと自分を笑い、起き上がる。悩んだところで解決もしないと、夏休みの予定を確認しようと起き上がる。

「ええと……」

鞆の中から補習予定の写しを取りだし、水泳部のスケジュールと確認する。

「和正ー、電話よー」

スケジュールを取り出したところで階下から母に呼ばれた。氣勢をそがれた感じでもややもやしつつ、生返事を返して部屋を出た……。

「はい、代わりました」

『あ、田所君？ 私、優奈だけど』

相手は優奈だった。

今日の出来事を思い出すと話しづらい気持ち強いが、落ち着いた形でしっかりと話をしたい気持ちもある。電話ならお互い顔を見ないでしゃべれることもあり、多少気楽さがあった。

「ああ、なんだ？」

用事など一つしかないだろうけれど、そっけない素振りをした。

「あ、今日のことなんだけど、私、田所君が犯人だと思ってないから」

「ああ、なんだそのことか。そう言ってくれるとほっとするよ」

「うん、なんか、私もあの時てんばっちゃってさ、落ち着いて話すことできなかったから……。それで、ちゃんと話しておかないとって言われて」

「ああ」

和正は優奈が信じてくれていることに心の底から安堵していた。最近は一変に距離を取ろうとそっけないどころか不愛想にしていた。

それは彼女にも不信を与えていたことであろう。それでも信じてくれる優奈の言葉に涙が出そうになる。それを隠そうと、裏返りそうな声を絞る。

「それじゃ、ごめんね。こんな時間に……」

「いや、別に……いいよ。ありがと」

「うん、じゃあね」

通話口から無機質な音が聞こえる。それでもしばらく受話器を耳に当てて立ち尽くしていた。

「どうしたの？ 和正」

話声が途絶えたのに電話の前に居る和正を不思議に思った母がふすまの向こうから顔を覗かせる。

「なんでもねーよ」

「そう？ なんか優奈ちゃん、変わったから、何かあったのかと思って」

「変わったって、そりゃ変わるだろ。いつまでも昔のままじゃないんだから」

「そうかしら？ あんたはいつまでたっても変わんないからさ」

「うるさいなあ」

母の小言にすっかり気持ちが戻ってしまった和正は、乱暴に受話器を置くとどすどすと階段を上っていった。「そうかしら？ なんか田所君いますか？ なんて他人行儀に言うし……って、ちょっと和正？」

＊＊

終業式はいつもように校長のありがたいお話と夏休みの過ごし方についての御達しだ。

生徒の大半はあくびを噛みしめつつ、聞き流し、終わるのを待っていた。

その中で和正のクラスは少々雰囲気が違う。

朝のホームルームの時間もヒソヒソ声で話す子が多かった。

和正は今も後から視線を感じており、どうも居心地が悪い。ただ、今学期の状況を鑑みると嫌われるだけのことをしており、そのことだろうと考えていた。

「……あいつ、結局犯人だったの？」

「……みただよ、昨日市川さんと言い合ってたの聞いたって緒方君言ってたし」

「……うわ、やっぱりかあ」

「……あれじゃない？ 最近さ、市川さんに見放されたし、逆恨みじゃない？」

「……あー、わかるー。なんかアイツって暗いもんね」

「こら、おしゃべりしてるんじゃない」

「……すみませんでした」

おしゃべりをしていた女子は杉田に叱られ口をつむぐが、かろうじて聞こえた端々の言葉は和正の気持ちを揺さぶるに十分な内容だった。

それはホームルームで理解できた。

担任の法子が夏休みの心構えについてプリントを読んでいる時のことだった。

事故・事件の項目の説明の中でプールの使用中は私物をできるだけ持ち込まないこと。盗難置き引きへの警戒、誤って他人のモノを持ち帰らないよう注意を促していた。

「このクラスには泥棒がいるもんな！」

「大崎君、今は先生が話しています。邪魔をしないように」

教室の後ろで浩司が言うので、法子もさすがにたしなめる。

「だってしゃーねーじゃん、委員長のブルマ盗んでしこった馬鹿が居るんだからよ」

「大崎君」

教室中がどよめきだす。話が逸れて長引きそうになりむっとする子。なんのことかわからず、したり顔の子に尋ねる子。あからさまに犯人とみなしている相手を睨む子。

様々な生徒の反応の中、真っ赤になって俯く優奈が居る。

「鍵だって水泳部なんだし、もってたんだろ？ その日だって授業さぼってどっかいってたもんなあ！」

大きな声で煽る浩司と、向けられる疑惑、好奇の視線。

「……それって俺のことか？」

和正はぼそりと呟く。その声は小さく、震えていた。

「他に誰がいるんだ？ おめーしかいねーだろうがよ。この変態」

「……てめえ、もっかい言ってみろ」

かたかたと椅子が音を立てていた。

「なにいきがってんだ？ 泣きそうなクセにさ。ダッセー奴！」

和正が震えている様を見て怯えていると感じた浩司はとどめとばかりにさらに煽る。すると教室中に響くほど大きな音がおきる。机と椅子が前後の子にぶつかった音らしい。二人とも突然のことに立ち上がる子を見てすぐ目を逸らす。

その子の顔色は真っ赤を通り越して青くなり、眉もふくわらいでもここまでつりあがるまいというぐらいおかしい形になっていた。

「ちょっと、田所君」

その異変に気付いた法子が止めようとしたが、和正はずかずかと教室内を歩き、浩司の前に立つ。

「もっかい言ってみろよ。俺がなんだって？」

「は、何度だって言ってやるよ！ お前がいんちよ……」

浩司も引っ込みがつかずに調子に乗って煽るので、和正も胸倉を思い切り殴った。

「ぐぎゃ！」

浩司は胸への奇襲を受けて呻く。さぼり気味とはいえ長身のバスケットマンなおかげで転倒こそ凌いだが、衝撃で肺の空気が無理やり外に出されて息が詰まる。そんな状況を怒りに我を忘れた和正が見逃すわけもなく、肩と腕と殴り掛かる。

「てめ！ おい、やめろ！」

せいぜい口喧嘩程度だと高をくくっていた大吾が慌てて掴みかかる。水泳部でかなり鍛えている和正だが、ガタイの大きな大吾に後ろから掴みかかられては身動きが取れない。

追撃が来ないことに顔を上げた浩司は仕返しとばかりに殴り返す。

「け！ てめーが盗んだんだろうが！ この変態野郎が！ きもいんだよ！」

殴られた衝撃で大吾が怯む。その隙に和正も負けじと殴り返す。

突如始められた乱闘に教室はパニックになる。女子の悲鳴と法子の悲鳴。止めようとする男子と煽る男子。

収集がつかなくなっていた。

「こらー！！」

その騒ぎを聞いて杉田がやって来た。怒鳴る杉田だが、和正も浩司も掴み合い、それを止めようとする男子達は止まらない。

「やめろ、やめろ！」

強引に二人の間に入り、突き放し、ようやく引き剥がした。

「一体なにをしてるんだ！ 今はホームルームの時間だろ！ 喧嘩の時間じゃない！」

「こいつが急にぴきって殴り掛かって来たんだよ！ 俺はわるくねー」

「ふざけんな！ あんだけ人を馬鹿にしておいて殴られたら被害者気取りか！？ てめえ、金玉ついてんのかよ！」

「あんだと！ 泥棒野郎が何いってやがんだ！」

「やめろやめろ！ 二人とも落ち着け！」

再び掴み合いそうになるのを杉田が慌てて止める。

「田所君！ 大崎君！ なにをしているんですか！」

掴み合いが終わったところでようやく法子が声を上げる。だが、声は震えており、腰も退けていた。

「浜崎先生、ひとまず二人を別室に……。おい、お前らは自習だ。プリントによく目を通すこと。読み終わったら帰ること。いいな」

このままホームルームを続けることが難しいと見た杉田は強引に指示を出すと、大柄な浩司を掴み、連れていく。

「田所君、君も来なさい……」

強がりつつ和正を視聴覚室へついてくるように言う。

「……くそ」

舌打ちすると床に血が落ちた。拳が震えているのに気づく。最近は喧嘩も控えていたが、やはり慣れない。

「田所君」

もう一度呼ばれ、和正は教室を出る。その時、向けられた好奇の視線に気づき、じろつと睨む。大半の生徒は巻き込まれたくないと視線を逸らす中、和正に敵意を込めた視線を向ける子もいた。

――どうしてあんなことしたの！？

――少しぐらい言われても我慢しないと！

――君はすぐに手を出すけれど、それじゃ動物と一緒にやないの。

――言い訳をしないの。

――君にも悪いところがあったんじゃないの？

――君はちゃんと話さないから、何を考えてるのかわからない。

――どうしていいわけばかりするの？ 自分のしたことを反省しなさい！

――だいたい君は……。

――とにかく暴力に訴えるなんて最低です。

――今日の事は親御さんにも報告します。

――夏休みの間、しっかりと反省してください。

――反省文はレポートで提出しなさい。

――疑われるのだって普段の生活が原因なんです。

――その目はなんですか！ 反省してないんですか！

視聴覚室に一人残され、真っ白なレポート用紙と鉛筆をじっと見ていた。

反省文を書かせることにいい加減意味がないことに気付いてもらいたい。そんな身勝手なことを考えているとだんだん興奮も収まってきた。

そうすると今度は手の痛みが起こる。興奮で痛みを忘れていたらしい。

試しに鉛筆を取ろうとすると、震えと痛みで落してしまう。

「……」

これでは反省文どころではないと思い、痛む右手をさする。鈍い痛みはあるが鋭くはない。折れてないだろうと無理やり指を曲げると声が漏れる。

「……ぐ」

無理やり指を曲げたのは痛かったが、おかげでぐーぱーと開いて握ってを繰り返せた。

鉛筆を拾い、無理に持たせて適当に文字を描こうとする。いつも以上に酷い文字になり、内容は読めない。どうせ浩司に謝るつもりもないと割り切り、みみずをのたちまわらせるようにしてレポートを埋めていた。

「田所、おまえなあ、なんであんなことしたんだ」

ドアが開き、浩司への聞き取りを終えた杉田がやって来る。

「みんなの前で馬鹿にされたからです」

「バカにされたってなあ、お前、そんなことで殴ってたらきりがないだろ。大人になれ」

「じゃあ先生は濡れ衣を着せられても黙っていろと言うんですか？」

「そうじゃないだろう。屁理屈を言うんじゃない。いいか、俺はお前がなんで暴力を振るったかについて聞いてるんだ。お前はなんでも暴力で解決できると思ってるのか！？ 違うだろ？ なんで我慢しないんだ。自分が潔白だっていうのなら何を言われても我慢できるし、皆もそれをわかってくれるんだ。それなのに暴力を振るって……。そういう短気な奴だから疑われるんだ。わかるか！」

「……」

全く納得できない言葉に和正は睨み返す。さすがに杉田は怯まず、和正の頭をおさえて机にこすりつける。

「返事はどうした！ お前はホームルームを滅茶苦茶にしたんだぞ？ 反省つてものがないのか！ 反省しろ！」

「……」

「誰が反省なんかするか！ あいつが俺を泥棒だと言ったんだ！ 怒って当然だ！」

「なんだ、その態度は！ ふざけるんじゃない！」

机にむりやり額を押し付けられる和正も負けじと踏ん張り睨み返す。

「……」

「……」

お互い意地を張り合い、にらみ合う。和正は机をずらし、なんとか外そうとする。机の脚を蹴り、倒す。頭をおさえていた杉田はバランスを崩し、一緒に床に倒れてしまう。

「どうかしましたか？ 杉田先生……」

物音に教頭と松子が戸を開けて様子を伺う。

「すみません、田所君が暴れだしまして」

「なに言ってるんだ！ お前が暴力を振るったんだろうが！」

「何を言ってるんだ。だいたいお前が机を蹴るのが……」

言い返す杉田を無視して松子が和正に近寄り、額を見る。

「大丈夫かしら。かなり腫れているようだけど……」

額に手を当てて様子を見ようとする松子。指先が腫れた部分に触れて反射的に離れる。

「ごめんなさい。ちょっと冷やした方がいいわね。教頭先生、ここでお話するより、保健室でお願いできますか？」

「そうですね」

教頭は頷くと戸を大きく開けて促す。

「さ、行きましょう」

「……」

和正は無言で松子の後ろをついていこうとするが、杉田が肩をおさえる。

「待ってください。今は私が田所君と話をしているとこです。生徒指導は教員の仕事ですので、まずはここで話を聞きます」

「話を聞くのであれば保健室でも良いでしょうか？ それとも二人きりじゃないと何か都合が悪いことでもあるのでしょうか？ 見たところ田所君は唇を切っているようですし、歯や手を折っていたらできるだけ早く処置が必要です。指導はその後にお願ひできますか？」

「今井先生、鉄は熱いうちに打つのが肝心です。今わからせるのが重要なんですよ。わかってください」
「では聞きますが、杉田先生は田所君に何か後遺症が残った時、例えば破傷風を併発してしまったとして、責任を取れますか？」

「私は生徒の指導に対し、常に責任を持っております」

「そうですか。それは立派な心構えですね。さ、行きましょう、田所君」

杉田の無責任な発言に松子は和正を出ていくよう促す。

「今井先生！」

「まあま、杉田先生、君の熱意はわかったよ。うん、立派だ。だが、まずは治療を優先しようじゃないか。もしかしたら病院で診察する必要がでてくるかもしれないんだ」

教頭は食い下がる杉田を宥める。その間に二人は廊下に出た……。

＊＊

保健室、松子は椅子に座った和正の額、腕、手を順番に見る。

青あざが見えるけれど充血は無い。額のこぶと手をアイシングする。

「曲げられる？」

「はい、さっきより」

「そう。痛みは？」

「ないです」

「冷たくしてると大丈夫なのね。触った感じだと折れていないわね。大崎君だっけ？ どこを殴ったの？ 頭とか？」

「いえ、頭はなぐってません」

「そう。じゃあ、大丈夫かしらね」

「なにがですか？」

「頭は頭蓋骨で覆われてるからね。手で殴ったりすると手の方が折れるのよ」

温和な彼女らしからぬ物騒な発言をさらりと言う松子が意外だった。

「こういう仕事をしていると、いちいち喧嘩ぐらいじゃ驚かなくなるのよ」

そういつて赤チンを額に塗る。ぴりりと痺れが走り、目を瞑る。

「我慢なさい。君はそういうことをしたんだから」

責めるわけでもなく、淡々と言われると我慢せざるをえない。ただ、普段の保健室の優しい擁護教諭というイメージより冷たく感じてしまう。

「泥棒騒ぎがあったんだって？ それの犯人だって疑われてるのね」

「……俺は違います」

「それは先生にはわからないわ」

「俺は！」

「ほらほら、興奮しない。興奮すると血が止まらなくなるから口の中気持ち悪いでしょ。うがいしてらっしゃい」

手慣れた様子でいなし、紙コップを渡してくれた。

「うがいしたあと、歯を嚙んでみて。ぐらぐらしてない？ 塩もあるから少し溶かしてね」

言われた通りに塩を入れてうがいをする。傷口に触れて痛い。歯を嚙みしめてみるも特に異常はなかった。ごろごろと喉を鳴らしてべえっと吐きだす。

「で、とりあえず何があったのか、時系列で話してもらえるかしら？」

「はい……、ホームルームで大崎が俺を……」

「その前かしら。えと、なんかが盗まれたとかそういうの……」

「……」

「話しくいと思うけど、はっきりさせておいたほうが田所君的にも良いと思うわ」

松子はノートを開き、ペンを持つ。和正をちらりと見るとノートに視線を落し、泥棒事件と書いていた。

松子は押し付けるようなことは無いけれど、拒否しづらい雰囲気で話を進めてくる。和正は傷の手当てをしてもらった手前、椅子に座った。

「それで、君の鞆の中に？ 不思議なこともあるものね。それを一緒に見ていたのが芳雄君、ええと渡辺君なのね」

松子の質問への返答はいちいち書き留められる。時折和正が言い間違えた時は斜線を引き、確認をしてから次の出来事を聞く。急がずじっくりと確認をする松子に和正もだんだんと頭が整理でき、流暢に話せていた。

「盗難事件が起きた日、授業を抜け出したのは田所君を含めて数人なのね。で、その子達に聞き込みをしていた。帰ってきたら鞆に入っていた」

「もしかして聞き込みしてたことがばれて、俺が席を外している間に……」

「それは考えにくいわ。もし疑われていると感じいたら盗品を鞆に仕込むなんてリスクいね。どこかのコンビニのゴミ箱にでも捨てたほうが簡単よ」

「ああ、そっか」

「あなたがいつ帰ってくるかわからないのにそんなことできない。でも逆に君がすぐに戻ってこれないのを知っていたら、できたのかもね」

「それってどういう意味です？」

戻って来られないのを知っているとすれば、それはおそらく芳雄……。だが、心配してくれている彼がそんなことをするとは思えないし、思いたくない。

「はは、ごめんなさい。変なことを言ったわね。先生、ちょっと推理漫画を読み過ぎたみたい。保健室の先生が推理するっていう話なんだけどね……」

松子がくすっと笑いペンを止める。

「もう一度聞くけれど、浜崎先生に渡したのね？ その時、誰か他に居たかしら？」

「ええと……」

「そういえば、どうして自分でフォルダーに鍵を掛けなかったの？」

「え？ ああ、それは委員長にテスト中だから職員室に入るなって言われて思い出して」

「ああ、そういうこと。ふうん。じゃあ、一旦浜崎先生に聞いてみないといけないわね」

「……」

思いのほかしゃべっていたようで、時計を見ると既に昼を過ぎていた。

「先生はなんでそんなに話を聞いてくれるんですか？」

「……」

「浜崎先生も杉田先生も頭ごなしに言うだけなのに」

「……二人ともまだ若い先生だからね」

松子はふっとため息を置き、手を組む。

「君のしたことは叱られて当然のことだし、反省をすべきことです。反省を促すこと、罰を与える必要があるけれど、同時に原因を究明する必要があります。このことは教頭先生と一度話し合って、後でもう一度話し合いの場が持たれると思います。田所君もその時までには自分の行動を顧みて、考えを纏めていてください」

「はい」

「安易に反省してということではないので、そこも理解してください」

「……」

思わず反省しますと言いそうになったところで、言葉に詰まる。松子もそれを見抜いていたらしく、またくすりと笑っていた。

「それじゃあ今日はお昼ですし……あら、教頭先生」

ノックの後に教頭がやって来る。いかにも渋い顔付であった。

「今井先生、田所君とは」

「はい、いろいろお話を聞かせていただきました。それと、手と額、口の中ですが、見た目ほどの怪我は内容です。念のため、歯医者に行くことをお勧めするぐらいですね」

「そうでしたか。うーむ。困ったものだ。とりあえず、田所君、今日のところは家で謹慎とうことでいいかな。今後、学校に来てもらうことになる。ええと、補習のついでに話を聞かせてもらう。いいな」

「はい」

教頭の語気は強いが、松子の言う若い先生のような言い方ではない。叱られるにせよ、ようやく覚悟が決まった。だが、険しい表情の教頭とそれに相槌を打つ松子を見ていると今日は引き下がったほうが良いのだろうと感じた。

「失礼します」

「ああ、気を付けて」

「はい」

和正は頭を下げて教室を出た……。

＊

教室に荷物を取りに戻ると、誰も居なかった。

自習を言い渡された後は適当に頃合いを見て帰ってしまったのだろう。

和正は痛む手を庇いながら鞆を取り、教室を出た。

「……優奈さんが田所君はああいう人なんだよ」

階段を下りたところで話声が聞こえた。

「自分に都合が悪くなるとああやって暴力を振るう。昔からずっとそうだ。卒業制作の時もそう。彼が癪癪を起したせいで嫌な思い出になった」

声の主は文雄と優奈だった。

和正は聞くべきではないと思いつつも、自分のことを囁かれていると思うと無視できず、物陰に隠れていた。「本当に盗んでいないのであれば、ちゃんと言葉で説明すべきなんだ。たとえ相手が誰であろうと。でも、彼はそれができない。それは彼が盗んだからだよ」

「それは……」

「優奈さんだって見たろ？ 彼らがブルマを持っていたところを……。彼が盗んだからなんだよ」

「……うん」

その問いかけに頷く優奈を見て和正はどきりとした。

昨日、電話で自分を信じてくれると言った彼女が疑っている現実。疑われる理由は確かにある。けれど、それならばどうして……？

「で、昨日は電話したのかい？」

「うん。文雄君のアドバイス通り田所君に電話してみた」

「アイツはなんて？」

「信じてるって」

「そう、良かった」

「でも、嘘をついてるみたいで……」

「アイツだって優奈さんに嘘をついてるんだ」

「うん」

「田所は乱暴な奴だから、もし優奈さんが疑ってるって知ったら、君だって何されるかわからないだよ。これは自衛策。正当な行為だ。彼の身勝手な嘘とは違う」

——アドバイス……？ 文雄の？ 優奈が嘘をついている？

話の繋がりを察するに至り、和正は眩暈を覚える。潜水で限界に挑んで上がった時のようにくらくらする胸がぐっと苦しくなり、胸やけが広がる。お腹の周りかもやもやして下痢の予兆のような痛みがあった。

「これから夏休みだし、これが良いきっかけだと思うんだ。もう、田所君とは縁を切ったほうがいいよ。少しずつでいいから、そうしたらきっと彼も話しづらくなるよ」

「でも……、そう、なの……かなあ」

「優奈さんが優しいのはわかるけど、でも、こればかりは庇えないよ。これ以上は優奈さんの足かせになる。僕らだって夏期講習が忙しいんだ。いつまでも他人に同情するんじゃなく、自分を磨く為に頑張らなきゃ。今、田所を見捨てるのが、優奈さんの取るべき努力だと思うよ、僕は」

「……」

「それが彼の為でもある」

「え、田所君の為？」

「結局、優奈さんが甘いと、彼はいつまでもすがりつける対象が居ると思って努力をしなくなる。こじきみたいなものさ。それはただの甘やかし。もうそろそろ突き放して一人にさせてみるべきだ」

「一人にさせるの？ 私が甘やかしたから……」

「そうだよ。勉強をみてあげるにしても、レベルが違うから君が一方的に教える形になる。それじゃだめさ。彼が努力しなくなる。言い方は悪いけど、優奈さんの優しさが田所の努力するべき時を奪ってるんだよ」

「私が田所君のがんばるのを邪魔してるの……かな」

「そうだよ。あいつは君が居るから自分で勉強しないし、何か問題を起こしても優奈さんが居るから一人じやないって思う。だから横暴になるし、怠惰になる。合唱コンクールの時も、期末試験の時も、盗難騒ぎでもさ」

「……うん。田所君、確かに練習してくれなかったし、勉強も帰っちゃうし、大崎君と喧嘩しちゃうし……そうだね」

「そうさ。だから……もう、田所と……」

静寂の廊下にどざりと音がする。音に気付いた二人が振り返る。和正の痺れた右手から鞆が落ちた音だ。散らばる筆記用具。和正は拾おうとしたが、姿が見られるのが嫌で鉛筆の数本はそのままにして逃げる。今、優奈に会いたくない。

自分を信じていると言ったのは嘘だった。

彼女も自分を疑っている。

不信心を持っている。

合唱コンクールの時も、期末試験の勉強でも、盗難騒ぎでも、全てそうなのだろう。

自分から優奈と距離を置くつもりだったはずなのに……。

むしろ望んだ結末のはずが、どうして辛いのだろう。悔しいし悲しい。

本当はもっと自然に、後腐れなく離れたかった。

優奈と自分のステージが違うのはわかっている。進む道は違う。だから離れるべきなのだ。

だけど、疑われて離れるような結末は……。

逃げ出した。

靴を履き替えただろうか。痛い。見ると上履きのままで、靴は手に持っていた。

それでもいいからとにかく走る。

周囲がぼやける。今日は夏日だからカゲロウがゆらぐのだろうか？

通りがぐにやぐにやで足もふらつく。

吐き気が酷く、側溝に向かってえずくが唾が出るだけ。

ようやく自分が泣いていることに気付いた。涙が出ていたから景色が歪んでいるのだ。

心が苦しいのは、優奈に信じてもらえなかったことと、騙されたこと。無邪気に信じていた自分が滑稽で情けない。

だから良かった。明日からは夏休み。もう誰も居ない。誰とも会わなくて済む。だから、しばらくは、それが終わったらきっとひとりだけど、覚悟ができるはず……なんだ……。

電柱にしがみ付き、しばらくげえげえ言いながら、夏の日差しに焦がされていた……。